

日々の成長が
組織のチカラに

3年目の決意

No. 58



社会福祉法人北海道社会事業協会
小樽病院（柿木滋夫院長・松野千代
美看護部長、240床）は、一般急性期
入院料1を算定する急性期病院とし
て、2016年6月に地域包括ケア
病院（60床）を開設するなど、患者
個々の希望に沿った退院支援・退院
調整を重視しながら、地域の人々の
暮らしを支えています。看護部には
現在がん看護専門看護師1人と7領
域の認定看護師が在籍し、活動して
います。「患者に寄り添う」看護の実
現に向けて、「学び続けること」の重
要性も強く意識し、教育体制の充実
も推し進めています。今回は同病院
から3階病棟（循環器科、整形外
科）の鳥木恵さん、5階病棟（呼吸
器内科・外科、整形外科）の斉藤百
合香さん、山中夏未さんの3人にこ
登場いただきました。

小樽協会病院 （小樽市）

山中夏未さん（写真右）
5階病棟（呼吸器内科・外科、整形外科）
鳥木恵さん（写真中央）
3階病棟（循環器科、整形外科）
斉藤百合香さん（写真左）
5階病棟（呼吸器内科・外科、整形外科）

患者の思いの実現へ、
考え行動する先輩たちの
姿に看護の本質を実感

5階病棟（呼吸器内科・外科、
整形外科）に勤務する山中夏未さ
んは札幌市の出身です。幼い頃か
ら「漠然と看護師になりたい」と
思っていました。その思いを決定
づけたのは、中学校3年生の時、
東日本大震災の被災地で活動する
看護師のドキュメンタリー番組を
テレビで見たことでした。「看護
師ってすごい」―番組で映し出さ
れた看護師の姿が強く心に刻ま
れ、北海道看護専門学校（札幌

市）に進学しました。

山中さんは現在、プリセプ
ター、リーダー業務を担っている
ほか周術期管理チーム委員会に所
属しています。リーダー業務は、
自身の中で「まだまだ課題が多
い」とも感じています。全体を
見ることを意識しながら日々、研
鑽しています。多職種で活動する
周術期管理チーム委員会では、手
術期の患者の口腔ケアに視点を置
いた活動を展開しています。

同じく5階病棟の斉藤百合香さ
んは余市町の出身です。母親が介
護福祉士、姉が看護師のほか、親
戚に医療関係者が多くいました
が、斎藤さん自身は当初、母親と
同じ介護福祉士を目指していまし
た。しかし、次第に「患者さんに
できることの範囲が広い看護師」
になりたいと思うようになり、市
立室蘭看護専門学院に進学しまし
た。現在は、山中さんと同じくプ
リセプター、リーダー業務、周術



松野看護部長



斉藤さん、山中さんを支える5階病棟の仲間たち



同期で同じ病棟の2人はよきライバルであり、よき相談相手です。



終末期ケアも深めたいと考えている山
中さんは来春、第1子の出産を控えて
います。



全身のアセスメント力向上を目指してい
る斉藤さんの趣味は旅行と映画鑑賞です。

期管理チーム委員会で活動するほ
か看護研究に取り組んでおり、本
年度は「口腔ケアに関わった看護
師の意識の変化」に視点を置いた
研究を進めています。

3階病棟（循環器科）に勤務す
る鳥木恵さんは小樽市の出身で
す。両親が看護師で、幼い頃から
両親の働く姿を見て、自身も看護
師になることを決意。岩見沢市立
高等看護学校に進学しました。

精一杯サポートしれくれた
プリセプターは、
今でも尊敬する先輩

鳥木さんは現在、プリセプター

として新人ナースの指導に取り組
んでいます。プリセプターに対し
ては、「自分自身でまず考える」
ことを意識した指導を心がけてお
り、「事細かな指導というより、
本人が自覚を持って看護を深めて
いく中で困ったことをフォローす
る形で接しています」。

山中さんも「自分で考える癖を
つけることが大事」と考えている
ことから、鳥木さんと同様のスタ
ンスで指導に当たっています。

斉藤さんは、新人が入職から半
年程経過し少し業務に慣れてくる
頃に「気を引き締められるような
指導」を心がけました。また、勤
務時にすれ違ったときは、さりげ
ない声掛けをできる限り行うこと
も意識してきました。これは自身
のプリセプターである先輩の姿か
ら学んだことでした。「その先輩
はすれ違った時に必ず声をかけて
くれました。1年目はとにかく不
安だらけだったのでとても有難
かったです」。

鳥木さんも自身のプリセプター
からたくさんのことを学びまし
た。「私のプリセプターは1年生
の私が言うことを真っ向から否定
せず、きちんと聴いてフォローし
てくれ、私が自分らしく働くこと
を精一杯サポートしてくれた方で

した。今でも尊敬しています」と感謝の気持ちを伝えます。

鳥木さんは看護学生の時、自身の看護師としての根底となる、ある体験をしました。2年目の実習時、認知症の患者をはじめて受け持ちましたが、接し方が分からず、全くコミュニケーションが取れませんでした。しかし、指導教員がその患者に接した時、その患者は笑顔になり、別人のようにさまざまなことを話してくれました。その姿に鳥木さんはショックを受けました。「患者さんが自分らしく生活できるようにサポートしていくためにもたくさんの方の学びながら、自分の看護観をしっかり持って看護に取り組んでいこうと強く思いました」。

齊藤さんは、1年目に最初に看



鳥木さんを支える3階病棟の仲間とともに。

チャレンジ精神を胸に日々研鑽する鳥木さん。趣味は登山、キャンプとアウトドア派。



ます。絶飲食の状態でしたが、「スイカを食べたい」という患者の「最期の願い」を叶えるため皆で話し合いました。そこで家族にスイカの汁を持ってきてもらい、患者の口にくくめたところ、患者はすこく喜びました。そして、翌日の朝に亡くなりました。「患者さんの最期の思いを受け入れ、今何が最善かを考え実践した先輩たちの姿を見て、これが看護の本質だと実感しました」。

それぞれが目指すこと―「患者さんと向き合う」、「経験を重ね学び続ける」、「積極的な後輩支援」

山中さんは、こだわりが強く怒ってばかりいた患者に対し、少し及び腰になり、きちんと向き合えていない時間が続きました。しかし、気持ちを切り替え怒られても逃げずに自分から出向いて話を聴くことを心がけ、患者の考え、思いを察して先に行動することを

地道に取り組んでいきました。するとある日、その患者から「あなたが担当でよかった」と言われました。「忙しい中でも何を優先するかを考え実践することで、患者さんも心を開いてくれると感じました。あの一言は本当に嬉しかったです」。

リーダー業務を担ってから山中さんは、以前に比べ少し周囲を見渡せるようになったと感じています。医師の指示の根拠をより理解するための勉強も欠かさない毎日です。また、看護を深めるにつれ、「人に伝える難しさ」も実感しており、個に合わせた伝え方を変えるなど工夫して取り組んでいます。入職以来、不安なことも多かった齊藤さんは、迷いながらも慎重に一步一步前進し、看護師としての経験知を高めてきました。3年目に入り、患者・家族が「何を求めているのかを考えながら関わる余裕が少なくてきた」と感じており、リーダー業務やプリセプターなどの役割を担いながら日々、自身の看護を深めています。

鳥木さんは3年目に入り、「自分がどうしたいのか」ということをより明確に認識できるようになったと感じています。認識が明

確になったことで、自ら積極的に発信するようにもなりました。「これもプリセプターの先輩のおかげですし、私自身も新人や後輩にそうした支援を行っていきたいと思っています」。

同病院でさまざまな人たちに助けられながら成長している3人ですが、鳥木さんは今後、看護師として自身を高められることは何でも挑戦したいと考えています。「いろいろなフィールドを経験することで、自分のモチベーションも維持しながら、よりよい看護を追求していきたいです」。

齊藤さんは、呼吸器内科・外科病棟の看護師として、肺だけではなく関連する心臓や脳など全身的なアセスメント力を深めていきたいと考えています。また、今後、後輩と夜勤を担うケースも想定されることから、「急変時などで適切な指示、行動がとれるよう経験を重ねていきたいです」と話します。

山中さんも急変時の対応などにまだまだ不安を抱えていることから、「もっと経験を積み重ねることが必要」と考えているほか、終末期ケアについても学びを深め、自身の看護の幅を広げていくことを展望しています。

日々の成長が
組織のチカラに

3年目の 決意

No. 58



社会福祉法人北海道社会事業協会
小樽病院（柿木滋夫院長・松野千代
美看護部長、240床）は、一般急性期
入院料1を算定する急性期病院とし
て、2016年6月に地域包括ケア
病棟（60床）を開設するなど、患者
個々の希望に沿った退院支援・退院
調整を重視しながら、地域の人々の
暮らしを支えています。看護部には
現在がん看護専門看護師1人と7領
域の認定看護師が在籍し、活動して
います。「患者に寄り添う」看護の実
現に向けて、「学び続けること」の重
要性も強く意識し、教育体制の充実
も推し進めています。今回は同病院
から3階病棟（循環器科、整形外
科）の鳥木恵さん、5階病棟（呼吸
器内科・外科、整形外科）の斉藤百
合香さん、山中夏未さんの3人にこ
登場いただきました。

小樽協会病院 （小樽市）

山中夏未さん（写真右）
5階病棟（呼吸器内科・外科、整形外科）
鳥木恵さん（写真中央）
3階病棟（循環器科、整形外科）
斉藤百合香さん（写真左）
5階病棟（呼吸器内科・外科、整形外科）

患者の思いの実現へ、
考え行動する先輩たちの
姿に看護の本質を実感

5階病棟（呼吸器内科・外科、
整形外科）に勤務する山中夏未さ
んは札幌市の出身です。幼い頃か
ら「漠然と看護師になりたい」と
思っていました。その思いを決定
づけたのは、中学校3年生の時、
東日本大震災の被災地で活動する
看護師のドキュメンタリー番組を
テレビで見たことでした。「看護
師ってすごい」―番組で映し出さ
れた看護師の姿が強く心に刻ま
れ、北海道看護専門学校（札幌

市）に進学しました。

山中さんは現在、プリセプ
ター、リーダー業務を担っている
ほか周術期管理チーム委員会に所
属しています。リーダー業務は、
自身の中で「まだまだ課題が多
い」とも感じています。全体を
見ることを意識しながら日々、研
鑽しています。多職種で活動する
周術期管理チーム委員会では、手
術期の患者の口腔ケアに視点を置
いた活動を展開しています。

同じく5階病棟の斉藤百合香さ
んは余市町の出身です。母親が介
護福祉士、姉が看護師のほか、親
戚に医療関係者が多くいました
が、斎藤さん自身は当初、母親と
同じ介護福祉士を目指していまし
た。しかし、次第に「患者さんに
できることの範囲が広い看護師」
になりたいと思うようになり、市
立室蘭看護専門学院に進学しまし
た。現在は、山中さんと同じくプ
リセプター、リーダー業務、周術



斉藤さん、山中さんを支える5階病棟の仲間たち



松野看護部長



同期で同じ病棟の2人はよきライバルであり、よき相談相手です。



終末期ケアも深めたいと考えている山
中さんは来春、第1子の出産を控えて
います。



全身のアセスメント力向上を目指してい
る斉藤さんの趣味は旅行と映画鑑賞です。

期管理チーム委員会で活動するほ
か看護研究に取り組んでおり、本
年度は「口腔ケアに関わった看護
師の意識の変化」に視点を置いた
研究を進めています。

3階病棟（循環器科）に勤務す
る鳥木恵さんは小樽市の出身で
す。両親が看護師で、幼い頃から
両親の働く姿を見て、自身も看護
師になることを決意。岩見沢市立
高等看護学校に進学しました。

精一杯サポートしれくれた
プリセプターは、
今でも尊敬する先輩

鳥木さんは現在、プリセプター

として新人ナースの指導に取り組
んでいます。プリセプターに対し
ては、「自分自身でまず考える」
ことを意識した指導を心がけてお
り、「事細かな指導というより、
本人が自覚を持って看護を深めて
いく中で困ったことをフォローす
る形で接しています」。

山中さんも「自分で考える癖を
つけることが大事」と考えている
ことから、鳥木さんと同様のスタ
ンスで指導に当たっています。

斉藤さんは、新人が入職から半
年程経過し少し業務に慣れてくる
頃に「気を引き締められるような
指導」を心がけました。また、勤
務時にすれ違ったときは、さりげ
ない声掛けをできる限り行うこと
も意識してきました。これは自身
のプリセプターである先輩の姿か
ら学んだことでした。「その先輩
はすれ違った時に必ず声をかけて
くれました。1年目はとにかく不
安だらけだったのでとても有難
かったです」。

鳥木さんも自身のプリセプター
からたくさんのことを学びまし
た。「私のプリセプターは1年生
の私が言うことを真っ向から否定
せず、きちんと聴いてフォローし
てくれ、私が自分らしく働くこと
を精一杯サポートしてくれた方で